法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-08-30

〈書評と紹介〉河合克義著『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』

Deng, Jun / 鄧, 俊

(出版者 / Publisher)
法政大学大原社会問題研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌
(巻 / Volume)
634
(開始ページ / Start Page)
74
(終了ページ / End Page)
77
(発行年 / Year)
2011-08-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008765

河合克義著

『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』

評者：鄭　俊

はじめに

「いつも一人で赤とんぼ」と書き込まれた短冊を残し，死後１ヵ月の遺体となって発見された90歳の女性，行旅死亡人という名の身元不明で亡くなった人々―昨年の初め放映されたNHKスペシャル「無縁社会」は，こうした引き取り手のないまま自治体によって火葬・埋葬される３万２千人の実相をクローズアップし，多くの人々に衝撃を与えた。そしてこの年の夏，100歳以上の高齢者の所在が相次いで分からなくなる「消えた高齢者」が社会問題ともなった。安心して老いることのできない現代社会の一端が明らかになったとも言えるだろう。こうしたなかで，高齢者，とりわけひとり暮らし高齢者の実態解明は，高齢者福祉の分野だけではなく，現代社会と福祉を考えるうえでもっとも重要な研究課題の一つになっているように思われる。

河合克義『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』は，社会的孤立という視点から大都市のひとり暮らし高齢者の実態解明を行った研究成果の集大成であり，上のような社会的現実と研究課題に挑戦した，まさにタイムリーな労作である。

本書は総頁370頁にのぼり，豊富な資料探索と綿密で膨大な調査に裏づけられた大著であり，その全体を紹介し，また学術的あるいは政策的含意のすべてを明らかにすることは容易なことではない。ここでは，本書の概要を紹介し，評者が本書から学んだことのいくつかを明らかにし，高齢者の孤立問題の解明に参加したいと願うばかりである。

１　本書の構成と概要

本書の全体を知るうえでは，まず目次にそって構成を紹介することから始めることが有益であろう。序章と終章を含め全９章から成り立っている本書の構成は次のとおりである。

序　章　ひとり暮らし高齢者の地域的偏在
第１章　海外における高齢者の孤立問題研究
第２章　日本における高齢者の孤立問題研究
第３章　ひとり暮らし高齢者の社会的孤立問題の視点
第４章　ひとり暮らし高齢者の生活の基本的特徴
第５章　ひとり暮らし高齢者の親族・地域ネットワークと孤立問題
第６章　港区ひとり暮らし高齢者の具体的生活
第７章　鶴見区ひとり暮らし高齢者の具体的生活
終　章　大都市のひとり暮らし高齢者と具体的生活

高齢化が急激に進んでいるなか，そのあり方は地域によって異なる。そこで著者は，まず地域によるひとり暮らし高齢者の出現率を検討する。序章がこれにあてられ，1995年，2000年，2005年という３つの時点の国勢調査をデータベースに，都道府県別および市町村単位で分析が行われている。ひとり暮らし高齢者の出現率が高い地域として島嶼，過疎地，大都市の３つの分類が摘出される。さらに，大阪市や東京都

などの大都市では中心部での出現率が高いと述べられている。

第１章から第３章にかけて，文献研究を中心に据えて著者の研究視点が導き出されている。第１章ではイギリスをはじめ，フランスとオランダ等の海外における孤立に関する基礎的な研究，第２章では日本における高齢者の孤立問題研究や最近の研究動向が紹介されている。これらを踏まえ，第３章では社会的孤立の概念が定義されたうえ，研究の視点と意義が示される。

第４章から第７章までは調査研究，うち第４，５章はアンケート調査による量的研究，第６，７章は事例調査による質的研究である。

第４章では，東京都港区と横浜市鶴見区におけるひとり暮らし高齢者の生活の基本的特徴が述べられている。港区では，ひとり暮らし高齢者において女性が８割半と圧倒的に多いうえに，高齢化しつつある。経済的には，生活保護基準以下の生活を送っている者が３割であるのに対し，生活保護の捕捉率はわずか16％にとどまっている。家屋の老朽化，家賃の高騰，買物・外食・入浴の困難などの困り事は，都市生活に過疎地のような不便さをもたらしている。鶴見区ではひとり暮らし男性，特に前期高齢者層が多い。そして，住宅状況，経済的な側面，健康状態においては，男性の前期高齢者は多くの困難を抱えていることが明らかにされている。

第５章では，港区と鶴見区のひとり暮らし高齢者の親族・地域ネットワークの一般的特徴が概観されている。親族ネットワークは子どもの有無によって大きく変わる。子どもがいる場合は子ども家族とのつながり，子どもがいない場合は兄弟姉妹とのつながりが重要となっていることが調査データをとおして示される。健康上の問題，社会参加の機会や情報また社会関係の乏しさは社会参加活動の阻害要因となっているため，適当な情報提供や参加のきっかけづくりを進めていく必要があるという。

港区調査では，正月三が日をひとりで過した者が３割半，親しい友人がいる者が８割半，近所付き合いがない者が４割強，社会活動に参加していない者が４割強，緊急時の支援者がいない者は１割半となっている。鶴見区の調査では，正月三が日をひとりで過した者が約４割，相談相手としての親友がいる者が約２割半，近所づきあいがない者４割程度，社会活動に参加していない者が約５割半，緊急時の支援者がいない者は３割に達している。

第６章，７章では港区，鶴見区における訪問面接調査から得られた高齢者のひとり暮らしの実態が記述されている。量的調査の結果を類型化し，その類型ごとに行った訪問面接，および対象者の１週間の日記が含まれ，紹介された日記は孤立状態にある高齢者の生活実態や生の声を掘り起こし，生きているデータとして第一級の資料的価値を有しているように思われる。なお，不安定層，一般層，安定層という３区分ごとに典型事例があげられている。

終章では，不安定層の孤立状態にある高齢者に注目しつつ，量と質と２つの側面から港区と鶴見区における孤立状態にあるひとり暮らし高齢者の特徴，両地域の類似点および相違点がまとめられている。

結果としては，社会的孤立にある高齢者が港区でひとり暮らし高齢者の１割半，鶴見区で３割存在している。調査結果にもとづき，生涯のなかでの労働と生活の不安定＝貧困に加えて地域社会と家族の脆弱性が生み出す孤立問題が社会的孤立であるという結論が導き出されている。最後に，著者の提言として「選択化・契約化」を理念とした介護保険制度をはじめ，これまで民間事業者や住民に任せてきた社会福祉・社会保障の方向を変え，いのちを守ることは国

や地方自治体の責務であることが強調されている。

2　本書の特徴と意義

時代的にも社会的にも孤独死・無縁死という言葉に大きな関心が寄せられている昨今，本書は，社会的孤立に関する初めての本格的な研究と言ってもよいものである。特に，日本国内だけでなく，海外の先行研究や事例等を鳥瞰したこと，社会的孤立と孤独を区分して定義したこと，大規模でかつ量的研究と質的研究の両面から調査研究を行ったこと，指標の選び方，標本の類型化，日記データの使用などは，特徴的であると思われる。以下に評者が本書に啓発された，いくつかの点について述べてみたい。

(1) 社会的孤立という概念の意義

著者は孤立問題を議論する際，本人が孤立状態を自覚しているか否か，また寂しさや孤独を感じているかどうかにかかわらず，客観的に孤立状態にあること，そしてその客観的生活実態を的確に把握することを重視すべきであるとしている。この視点をもとに，氏は孤独と社会的孤立を厳密に区別するとともに，孤立状態を社会的孤立と定義する。そのうえで，孤立状態にあるひとり暮らし高齢者の生活実態把握を研究の入り口として，社会的孤立を防ぐ方策を見出そうとしている。これまでも，孤立そのものに関する議論はよく見られるが，孤立を社会的孤立とした本書の視点は注目されてよい。

ここでは「社会的」という言葉に２つの意味合いがあると理解できよう。一つは，孤立は孤独という主観的なものと異なり，客観的なものであるという点である。もう一つは，孤立状態に追い込まれる社会的背景とは何かを追求しようとされていることである。つまり，孤独が個人の感覚であるとすれば，孤立は社会的ないしは制度的に作られたものであることが強調されるのである。タウンゼントが初めて孤独と社会的孤立を区別し，孤立研究を一歩進めたとすれば，著者はその議論をより一層発展させ，日本における高齢者の孤立研究に新しい頁を開いたと言えよう。

(2) 研究視点における３つの要素

著者は，「階層性」「家族と地域社会の脆弱性と孤立問題」「政策が作り出す孤立と餓死・孤独死」という３つの要素から，社会的孤立という視点を問題提起している。第１に，ひとり暮らし高齢者の孤立は，独立して他とは無関係に，また個人的な事情で発生するわけではなく，特定の生活状態から生み出されるものであると論じられていることである。その特定の生活状態を規定する基底的な要素としては「階層的格差」があげられている。民間サービスの参入をすすめるために，高齢者の所得や貯蓄額を平準化し，「若い世代より上回る力」があるとする見方に対して，氏はひとり暮らし高齢者を不安定層，一般層，安定層という３階層に区分し分析する視点を示している。高齢者に社会的な矛盾が集中している今日，これは避けて通れない視点であろう。

第２に，親族ネットワークと地域ネットワークの状況から孤立状態を捉えようとされていることである。激しい労働者の地域移動，進行している地域の解体は，親族関係・地域社会の基盤を弱体化させた結果，社会的にもっとも弱い層である高齢者の孤立問題が深刻化していると指摘されている。第３に，政策が孤立と餓死・孤独死を生み出したという視点から，生活保護制度を例とし，諸制度・政策の方向性やあり方について検討されている。孤立問題においてはソーシャル・ネットワークと結びついた議論が多いなかで，本書は貧困問題，政策の欠如の視点を踏まえた独自の論点を打ち出していると言ってもいいであろう。

3　いくつかの気になるところ

最後にいくつかの気になるところをあげてみたい。

一つは，サンプルの取り方についてである。本書で行われた調査とそこから得られた発見は，ひとり暮らし高齢者の実態としてどれだけ一般化できるのであろうか。どれだけ応用できるかを確かめるために，ひとり暮らし高齢者世帯だけでなく，夫婦世帯や子どもとの同居世帯，地方や農村部の高齢者などのサンプルを捉えたほうがより説得力があるだろう。本書では，女性より男性のひとり暮らし高齢者のほうが深刻な孤立状態にあるということが明らかにされている。これは，評者が昨年参加した地方都市A市の高齢者生活実態調査においても同じ傾向がうかがえた。これとは逆に，大都市におけるひとり暮らし高齢者に特有の性格は何か，いますこし明確に理解できる手がかりがほしいものである。

二つは，分析の仕方には誤解を招くおそれがある点もあるように思われる。例えば，「緊急時に支援者がない者は男性が21.3％，女性が78.3％と約８割が女性である」（296頁）という分析に用いた数値は，ひとり暮らし高齢者全体における支援者がない男女の割合なのか，あるいは支援者がないひとり暮らし高齢者における男女の割合なのか，分かりにくい。つまり，数値が絶対値であるか，相対値であるかによって，見方が違ってくるからである。絶対値からみると，男性より女性のほうが深刻な孤立状態にあるが，調査対象者の８割半も女性であることから，相対的に男性のほうは実際に孤立していることになるのである。

さらに言えば，量的調査の結果と質的調査の結果とにズレが散見されるのも気にかかるところである。例えば，鶴見区の調査では後期高齢者の場合について説明されているが，前期高齢者の場合特に説明はない。「外出が週に１回以下の者」という指標を用いて類型化されながら紹介された高齢者の日記をみると，「スーパーへ行く」「昼に外食」「人工透析のためにクリニック」など（222～223頁）週に２回以上外出している者もいるように見えること，後期高齢者の事例において「正月三が日ひとりで過した」とする類型化されているが，あげられた２つの事例ではひとりではないという記述があること，「近所づきあいなし」というカテゴリーのなかにそうではない者もいることなど，データの整合性についてより丁寧な記述が求められるのではないであろうか。

いずれにしても，本書は高齢者の孤立問題に関する研究として，圧倒的に迫力を持っており，研究者はもちろん，多くの人々に読まれることを心から願って拙い書評を閉じたいと思う。

（河合克義著『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社，2009年11月刊，xii＋375頁，定価5,400円＋税）

（とう・しゅん　鹿児島国際大学大学院
福祉社会学研究科博士後期課程）